

## 解剖学書における解剖図の類型と歴史的変遷

坂井 建雄

順天堂大学医学部

解剖学の著作には、テキストを中心とする解剖学書と、図を中心とする解剖図譜とがある。解剖学書は人体の構造を文章で記述するもので、全身のさまざまな部位と器官を網羅する。解剖学書には、図を伴うものもあれば、まったく図のないものもある。解剖図の印刷技術は、16世紀初頭の木版画から始まり、銅版画、リトグラフ、木口木版画、写真製版と変遷してきた。現存する最古の解剖学書であるガレノスの『身体諸部分の有用性』と『解剖手技』から現代に至るまで110種類の解剖学書について、解剖図の有無とその印刷技術をもとに類型に分け、その歴史的変遷を調査した。

木版画による解剖図は、ベレンガリオ・ダ・カルピの『モンディーノ注解』（1521）から始まり、ヴェサリウスの『ファブリカ』（1543）を含め9点の解剖学書で用いられた。銅版画（アクアティントを含む）による解剖図は、16世紀後半から18世紀初頭の解剖学書22点で用いられた。リトグラフによる解剖図を用いたのは、19世紀初頭の3点のみであった。木口木版画による解剖図は、1840年代から20世紀初頭まで21点の解剖学書において用いられた。写真製版（CGを含む）による解剖図は、20世紀初頭以後の15点の解剖学書で用いられた。

解剖図の扱い方に基づいて、解剖学書を3つの型に分けることができた。1) 無解剖図型は、解剖学書が図を含まないものである。本文は図を参照せずに理解することを前提に書かれている。2) 別頁解剖図型は、図が原則として本文とは別頁に印刷されているもので、初期の木版画、銅版画、リトグラフの図を用いる解剖学書に見られる。この型の解剖学書では本文と図の関連づけが弱く、解剖図も1頁大の大きなもの、あるいは複数の図を1頁にまとめたものが作られた。3) 挿入解剖図型は、図が本文と同じ頁に印刷されているもので、木口木版画ないし写真製版を用いる解剖学書に見られる。この型の解剖学書では、本文と図が密接に関連づけられ、1冊あたりの解剖図の点数がきわめて多い。解剖図も小さな部分を扱ったものがおおく、全身を示す大きな図はほとんど用いられない。

歴史上の解剖学書における図の扱い方の変遷は、4期に分けることができた。1) 第1期は16世紀初頭に木版書の解剖図が登場するまでの時期で、無解剖図型のものが現れた。2) 第2期は16世紀中葉～18世紀初頭で、おもに別頁解剖図型の解剖学書が出版された。この時期の解剖学書でも、ヴェサリウスの『ファブリカ』（1543）は図がしばしば本文中に挿入され、本文と図がよく関連づけられていた。3) 第3期は18世紀初頭～19世紀初頭で、おもに無解剖図型のものが多数出版された。4) 第4期は19世紀中葉以後で、おもに挿入解剖図型の解剖学書が出版された。

第3期の18世紀初頭～19世紀初頭では、大多数の解剖学書は図を用いない。この時期の最初期に出されたウィンスローの『人体構造の解剖学示説』（1732）は、独自の図ではなくエウスタキウスによる銅版書の解剖図を流用しているが、機能についての推論を排除して解剖学的事実のみを扱うスタイルを確立した。このスタイルが無解剖図型の登場を促したと考えられる。チェセルデンの『人体解剖学』（1713）とクルムスの『解剖学表』（1722）は、例外的に独自の解剖図を数多く含み、人気を博して18世紀後半に入っても版を重ねた。

第4期の19世紀中葉に入って解剖図が復活したのは、本文と解剖図を同じ紙面に印刷する木口木版画が登場したことと関係する。これにより本文と解剖図を関連づけた編集が行われ、人体の構造について豊富な情報を読者に届けることが可能になった。実験室医学がもたらしたデータの爆発的な増加や、細胞説、進化論といった生物学の理論的枠組みの拡大だけでなく、印刷・出版技術の発展も、19世紀以後の解剖学書に大きな変化をもたらした。